

## あらすじ

時は400年前の戦国時代。キリシタンであった大名の高山右近は、武将としても、茶人としても優れ、人々の称賛の的であった。

天正10年、明智光秀は、本能寺において信長を討つ。その時右近は、秀吉についた。武士道に従って戦い貫いてきた右近だったが、「信仰の道」とのギャップに悩むこととなる。一方、明智光秀の娘、細川ガラシャは、右近を憎みきれずに悩む。やがて、高槻城主であった右近は安土のセミナリオを高槻に移す。高槻城下の生活は穏やかであり、ロレンソの宣教は人々の中で広がっていった。

天正13年、秀吉から棄教を迫られた右近は、全てを捨て、信仰を貫くことを決意する。領地を秀吉に返還し、隠遁生活をしてきた右近は、内藤如庵と共に加賀の前田家に客将として招かれる。やがて徳川の時代になり、キリシタンに対する迫害はますます強くなる。ついにキリシタン追放令が前田家にも下り、それを受けて右近は加賀を退去。長崎の港からマニラへ追放されることとなる。

長崎から、フィリピン・マニラへの船旅は、暴風が荒れ狂う過酷な旅であった。マニラへ着いた右近一行は、スペイン総督シルバにより、大歓迎を受ける。が、スペイン人に虐待されるフィリピン人の姿を見て戸惑う。シルバから「徳川と闘い、日本をキリストの国にしよう」と援助を申し出られるが、それを拒否し、虐げられた人々を救おうとする右近の姿に土地の女(女召使)も、キリストの教えへと導かれてゆく。

元和元年、死を前にした右近は、遺言を残して天に帰る。

「共に日本からマニラに追放された者たちよ。剣を取る者は皆、やがて剣で滅びん。この地の人々と手を取り合い仲良く生きよ。そして何時の日か日本へ平和の使者として愛を届け、世界につくせ。」

このような右近の生き様は、武力に振り回される現代社会に、人類が歩むべき道を指し示してくれるであろう。



## 日比合作オペラ「高山右近 至福の王者—剣か愛か」ハイライト公演によせて

高山右近から学ぶもの。それは、世俗的な名誉や権力などを追い求めることより、神から与えられた道を貫く勇気と、情熱を持ち続けることの大切さではないでしょうか。

しかし、神を信ずるといふ人々が世界各地で殺し合いを続けています。神とは何か？

それぞれの神が、違う神を信ずるものと戦えと命じているのか？

そんなはずはありません。「万物の創造主が神」とするならば、あらゆる宗教が理解し合い、手を取り合える日を願って努力を続けるべきではないでしょうか？私たちが神を信じる者は、そのために何ができるのか？私たちが芸術に携わる者もまた、力を尽くしたいと思います。

私が目指すオペラは、素晴らしい声と音楽の力を皆様にお聞かせするだけではありません。平和への願いを、オペラだからこそ出来る方法で皆様と共にしたいのです。私たちのこのオペラ「高山右近」が皆様の心と響きあい、平和への道をご一緒に歩めるよう祈っております。

指揮、総監督 石多エドワード

## 登場人物

高山右近：戦国キリシタン大名。武将としても、茶人としても人望があり、人々の尊敬を受けるが、キリシタンの信仰を捨てることを拒否したため、マニラに追放される。

ロレンソ：盲目のキリシタン修道士。右近はじめ、多くの人々を信仰に導く。

惣兵衛：ユーモラスで忠実な右近の家来。

ジュスタ：右近の妻。最後まで右近を支え、励ます。

ルチア：右近の娘。前田家の縁戚に嫁いでいたが、苦悩の末、夫や子供と離れて、マニラに追放される道を選ぶ。

ビビアナ：元気な右近の孫娘。

内藤如庵：右近と共にキリシタン大名として追放される。右近の良き理解者。

内藤好次：如庵の息子。交戦的な性格だが、最後には武力による布教を否定するに至る。

明智光秀：細川ガラシアの父。信長を討った為、右近に追われる。

細川ガラシア：細川忠興に嫁いだ絶世の美女。右近のキリシタン信仰に導かれてゆく。

細川忠興：右近に友好的な大名。

千利休：右近や忠興の茶道の師。

乞食女：武士の妻だったが、夫が戦死し、売春婦となり、皆に蔑まれる。

およね：気の強い、陽気な百姓女。

豊臣秀吉：右近に棄教を迫るが断られ、右近を追放する。

シルバ：好戦的なスペイン総督。右近に徳川幕府を倒す協力を申し出るが、断られる。

女召使：スペイン人の弾圧により、夫が反逆者として処刑され、騒ぎ立てるが、右近により信仰に目覚め、理想のキリシタンとなる。

